安来市埋蔵文化財調査報書告第３８集

小馬木Ⅱ遺跡

堅信寺永代供養塔建立に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００２年３月

安来市教育委員会

『小馬木Ⅱ遺跡』正誤表

Ｐ３．周辺の遺跡一覧表内

（誤）

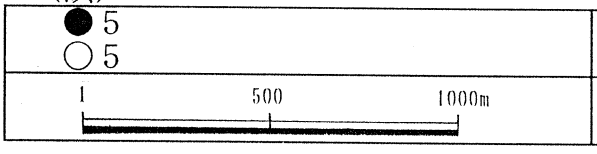
番号	遺 跡 名	概　　要
10	浜小崎遺跡	古墳前期集落跡、鉄斧、砥石、土師器
11	浜小崎古墳群	古墳６、前方後円墳（横穴墓に伴う？）、馬形埴輪、円筒埴輪、横穴墓１（方墳）

（正）

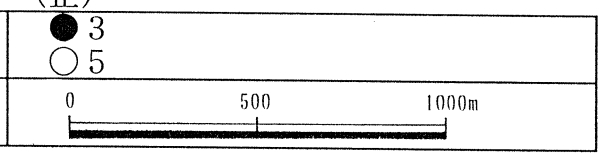
番号	遺 跡 名	概　　要
10	小馬木遺跡	古墳ほか
11	浜小崎古墳群、浜小崎遺跡	古墳６、前方後円墳（横穴墓に伴う？）、馬形埴輪、円筒埴輪、横穴墓１（方墳）、古墳前期集落跡、鉄斧、砥石、土師器

Ｐ４．第２図　周辺の遺跡位置図中

（誤）



（正）



安来市埋蔵文化財調査報書告第３８集

小馬木Ⅱ遺跡

堅信寺永代供養塔建立に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

例　　言

1．本書は、宗教法人堅信寺の委託を受けて安来市教育委員会が平成１３年度に実施した小馬木Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。

2．現地調査期間は、以下のとおりである。

平成１３年６月２５日～平成１３年９月６日

3．調査組織は以下のとおりである。（順不同・敬称略）

委 託 者　宗教法人堅信寺　代表役員　加藤富生
受 託 者　安来市長　島田二郎
調査主体　安来市教育委員会
事 務 局　市川博史（安来市教育委員会　教育長）
　　前田敏巳（安来市教育委員会　文化振興課長）、武上　巧（同文化係長）
調査指導　東森市良（安来市文化財保護委員）
　　大谷晃二（島根県立松江北高等学校）
調 査 員　大塚　充（文化係主事）、水口晶郎（　同　）
内務整理　泉あかね

4．現地調査及び資料整理については上記の調査指導の他、井川測量有限会社をはじめ関係諸機関並びに発掘調査に参加いただいた堅信寺事務局の皆様に多大なご指導・ご協力をいただいた。

5．本調査に伴う遺物・実測図・写真は安来市教育委員会で保管している。

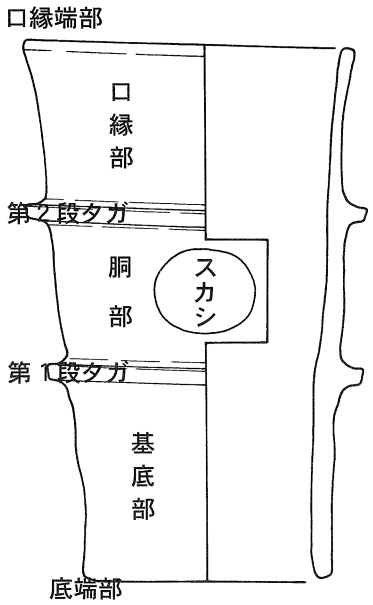
6．本書で使用した遺構記号は次のとおりである。

ＳＸ（不明遺構）

7．本書の挿図の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標の軸方位である。

8．図面・遺物の整理は安来市教育委員会で行い、本書の担当執筆は大塚が行った。

9．本書で使用する埴輪の各部の名称については右図のとおりである。



目　　次

第１章　　調査に至る経緯と経過 …… 1
第２章　　位置と環境 …… 3
第３章　　調査の概要 …… 6
第４章　　まとめ …… １７
写　真　図　版
報　告　書　抄　録

挿図目次

第１図　調査区配置図（１：１０００） …… 2
第２図　周辺の主要遺跡位置図（１：２００００） …… 4
第３図　調査後測量図（１：１００） …… 6
第４図　調査区セクション実測図（１：６０） …… 6
第５図　第１埋葬施設実測図（１：２０） …… 7
第６図　第１埋葬施設出土遺物実測図（１：３） …… 8
第７図　第２埋葬施設実測図（１：２０） …… 9
第８図　第２埋葬施設出土遺物実測図（１：３） …… １０
第９図　第３・第４埋葬施設実測図（１）（１：２０） …… １１
第10図　第３・第４埋葬施設実測図（２）（１：２０） …… １２
第11図　第３埋葬施設断面実測図（１：２０） …… １３
第12図　第４埋葬施設断面実測図（１：２０） …… １３
第13図　第３・第４埋葬施設実測図（３）（１：２０） …… １４
第14図　第３・第４埋葬施設出土遺物実測図（１：３） …… １５
第15図　第５埋葬施設実測図（１：２０） …… １５
第16図　ＳＸ０１実測図（１：２０） …… １６
第17図　トレンチ出土遺物実測図（１：３） …… １６
第18図　出土埴輪の比較 …… １８

第１章　調査に至る経緯と経過

平成９年８月１１日付で宗教法人堅信寺より山陰佛立センター建設基本構想作成に伴う分布調査依頼が提出された。これをうけて、安来市教育委員会は分布調査を実施し、平成９年１０月１３日付で試掘調査が必要である旨、回答を行った。ただし、基本構想の作成に伴う協議であったため未確定な部分が多く事業実施に際して再度の協議を必要とした。その後、平成１１年１０月に提出された事業計画に基づき再度、分布調査を行った。事業区域は当初のものよりも範囲が狭まっていたが、丘陵の斜面などに遺跡の存在する可能性があり、試掘調査を必要とした。このため事業者・安来市教委の両者で試掘調査についての調整を行い、平成１２年１２月より現地での調査にはいった。

当初、１７箇所のトレンチを設定し試掘調査を開始したが、第４トレンチから埴輪棺及び石郭の一部らしき石組みの検出を見たことから、範囲確認のため３箇所のトレンチの追加を行い、合計２０箇所のトレンチを掘削した。この結果、第４トレンチの他にも第１１トレンチからも埋葬施設の検出があり、この周辺について本調査が必要であることが判明した。埋葬施設の検出により周辺に古墳の存在する可能性も考えられたが、丘陵頂部の第３・第６・第７トレンチは表土層の下はすぐに地山層であり、周溝等の検出もみられなかったためこの場所に古墳は存在しないことが分かった。調査区として設定した丘陵斜面部分にも試掘調査段階ではそれらしき証拠は認められず古墳の存在する可能性は低いように思われたが本調査時に改めて精査することとし、遺構の検出されたトレンチの埋め戻しなどを行い、平成１３年２月末に現地での試掘調査を終了した。その後、再度本調査に向け調整を行い、平成１３年度事業として本調査を行うこととなった。

本調査は、平成１３年６月２５日より現地にはいった。密集して生える竹の伐採やびっしりと根を張る表土層の除去は予想以上に苦労したが、何とか表土層までを除去し遺構の検出面までの掘削を進めた。多少の差異はあるが調査区内はあまり多くの堆積は見られず、調査前の地形とほぼ同じ傾斜で緩斜面が続き、試掘調査時に想定した古墳の存在を裏付ける盛土層・周溝などの遺構は検出することはできなかった。しかし、第１１トレンチの西に石の集積があり、表土層の上に最上部の石が現れている状況にあった。不整形な石の並びにも見えたため流入によるものとも考えられたが精査した結果、石郭をもつ埋葬施設であることが判明した。ただし、周辺からはこの遺構が古墳となる要素は検出できず、墓壙自体の規模も小さいため古墳に伴うものではなく単独で立地するものであると考えた。また、この遺構の検出に伴って、性格不明であった第４トレンチ内の石組みが埋葬施設の一部であると判断した。

最終的には、調査区内から５つの埋葬施設とひとつの不明遺構を検出した。しかし、いずれの遺構も残存状況は良くなく、後世の地形改変に伴って破壊されているものと思われた。埴輪棺が完全な形で検出できた第１埋葬施設、比較的深い位置から検出できた第４埋葬施設についても墓壙の一部が破損しており、完全な形で検出できた遺構はなかった。こうしたことから、記録保存とすることとし平成１３年９月に現地での調査を終了した。

第１図　調査区配置図（１：１０００）

第２章　位置と環境

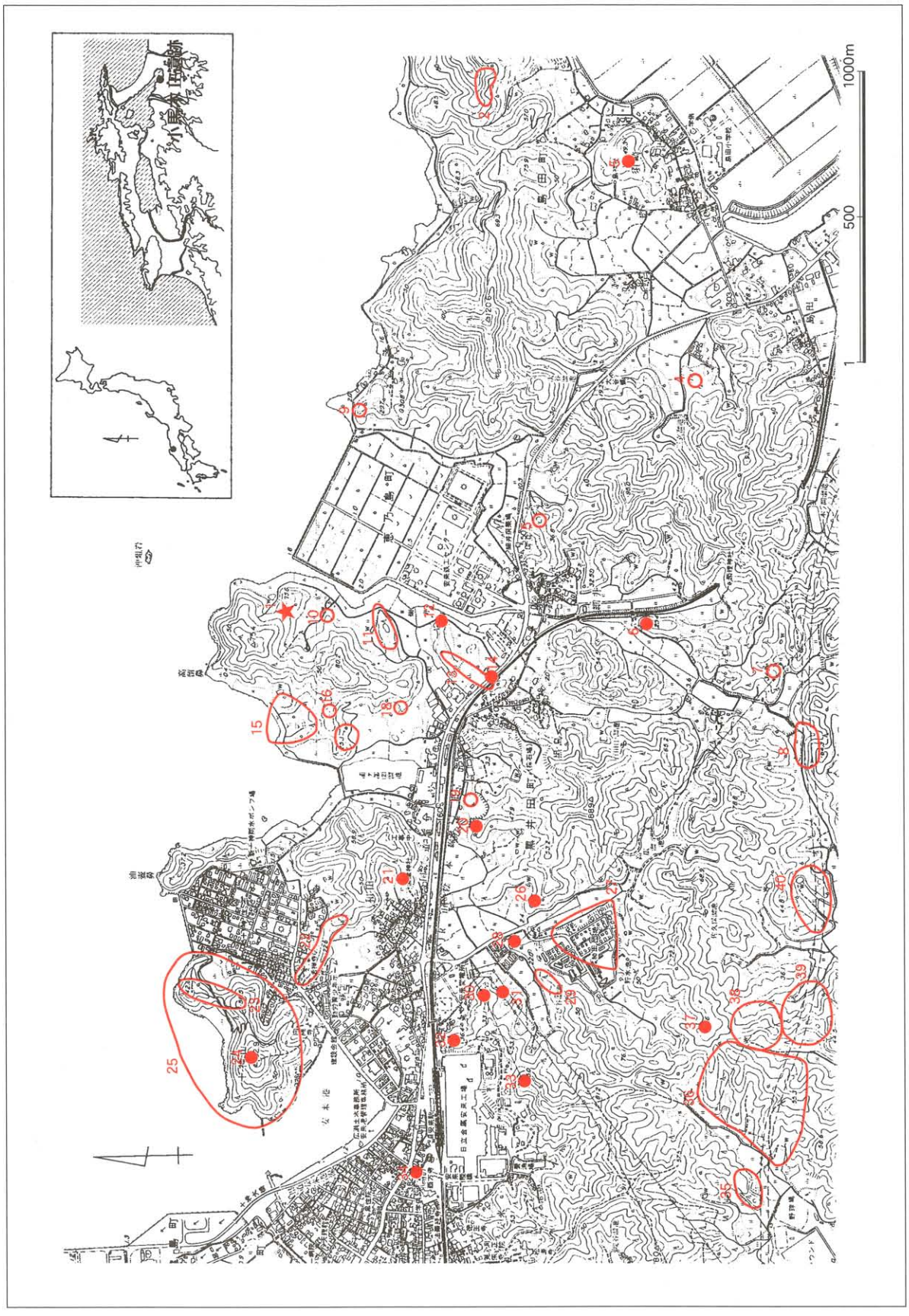
小馬木Ⅱ遺跡の所在する安来市黒井田町周辺は近年、道路建設・住宅地造成などの大規模開発による発掘調査例が増加している。当遺跡の所在する丘陵の西側には１９穴からなる小汐手横穴墓群(1)、家形埴輪等が出土した小馬木古墳群(2)、単独ではあるが玉髄製の旧石器が出土した小汐手遺跡(3)の３つの遺跡がある。この他にも長曽土壙墓群・刎畑１号墳(4)、八神横穴墓群(5)など近年、安来市教育委員会が行った調査のほとんどがこの周辺に集まっており、併せて島根県教育委員会が行った安来道路予定地の発掘調査等により、この地域の歴史的環境を考える上で多くの資料の蓄積がなされてきている。地形的には、当遺跡が立地する黒井田町周辺の中海沿岸部は、典型的な沈水性海岸線をなしており低地の発達が見られない。また、西側には『出雲国風土記』に砥神島として記載のある十神山があり、上古には中海が内陸部まで入り込んでいたことが想像できる。

以下、時代ごとに周辺の遺跡を見ていきたい。

旧石器～縄文時代にかけては、前述の小汐手遺跡の旧石器や縄文土器、高広遺跡の縄文土器など遺物の検出にとどまる。弥生時代前期も小汐手遺跡での弥生土器の検出が見られるだけである。弥生時代中期には確認されている遺跡数は少ないが、高広遺跡(6)、宮内遺跡(7)で竪穴住居跡が検出されている。弥生時代後期以降遺跡の確認例は増加し、高広遺跡、宮内遺跡、小汐手遺跡、米垣遺

周辺の遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	概　　要	番号	遺　跡　名	概　　要
1	小馬木Ⅱ遺跡	古墳、円筒埴輪棺	23	小十神山古墳群	円墳２、鉄刀
2	赤崎山横穴墓群	横穴墓２	24	十神山古墳	前方後方墳？、蒲鉾型蓋石石棺
3	ちょう塚古墳群	方墳２、陶棺	25	十神山城	城跡、室町～戦国期山城
4	剣御崎さん古墳	円墳、消滅	26	米垣遺跡	弥生後期集落跡
5	小浜古墳	古墳、墳形不明、石材露出	27	高広遺跡	弥生～奈良集落跡、横穴墓13、家形石棺、金銅装双竜環頭大刀
6	大納言山古墳	円墳、鉄剣、鉄刀			
7	猫ノ谷遺跡	弥生後期集落跡	28	客神社跡古墳	古墳、蒲鉾型蓋石石棺２、須恵器
8	オノ神遺跡	弥生後期集落跡、奈良～平安祭祀跡	29	長廻谷古墳群	円墳
9	八神横穴墓群	横穴墓４、鍔付大刀	30	佐久保山古墳 佐久保山横穴墓群	円墳、横穴墓群
10	浜小崎遺跡	古墳前期集落跡、鉄斧、砥石、土師器			
11	浜小崎古墳群	古墳６、前方後円墳（横穴墓に伴う？）、馬形埴輪、円筒埴輪、横穴墓１（方墳）、	31	黒井田小林遺跡	弥生後期集落跡、掘立柱建物跡
12	米垣横穴墓	横穴墓１	32	毘売塚古墳	前方後円墳、葺石、舟形石棺、円筒埴輪、鉄剣、鉄鉾、ヤス、鉄鏃
13	黒鳥横穴墓	横穴墓２、鍔付大刀、鉄鏃、刀子、須恵器	33	御崎谷古墳	舟形石棺、鉄剣
14	大日さん古墳	円墳、葺石、円筒埴輪	34	愛宕山古墳	古墳、消滅
15	小汐手横穴墓群	横穴墓19、銀象嵌大刀２、銀装ガラス玉	35	大原遺跡	弥生後期集落跡、古墳中期玉作跡、横穴墓２、家形石棺、青銅鏡片
16	小馬木古墳群	古墳３、家形埴輪、円筒埴輪、珠文鏡			
17	小汐手遺跡	弥生後期・古墳中期集落跡、旧石器削器	36	臼コクリ遺跡	弥生後期落跡、弥生後期墳丘墓・土壙墓、古墳、円筒埴輪、横穴墓19（後背墳丘）、家形石棺６、金銅装単竜環頭大刀、子持須恵器壺
18	長曽遺跡	古墳後期集落跡			
19	浦ヶ部遺跡	集落跡、縄紋土器、須恵器	37	大荒神谷古墳群	前方後円墳
20	長曽土壙墓群 刎畑１号墳	弥生後期区画墓・土壙墓・木棺墓 円墳、円筒埴輪、鉄刀、刀子	38	岩屋口北遺跡	弥生後期集落、横穴墓12（前方後円墳形墳丘）、円筒埴輪、馬具、鉄滓
21	宮の山古墳	古墳、箱式石棺	39	岩屋口南遺跡	弥生後期・古墳中期集落跡、古墳後期以降掘立柱建物、横穴墓７、鉄刀
22	油坪古墳群	前方後方墳１、方墳４、形象埴輪、円筒埴輪列、中世火葬墓、陶製宝篋印塔２、石製五輪塔	40	越峠遺跡	弥生後期・古墳後期～奈良集落跡



第２図　周辺の主要遺跡位置図（１：２００００）

跡(8)、大原遺跡(9)、黒井田小林遺跡(10)、臼コクリ遺跡(11)、越峠遺跡(12)、岩屋口北遺跡(13)など多くの集落跡が検出されている。また、６８基の埋葬施設が確認された長曽土壙墓群(14)もこの時期のものである。

古墳時代前期には礫床に割竹形木棺を安置した新林古墳(15)が築造される。また、鉄斧の出土した浜小崎遺跡(16)が集落跡として確認されている。中期にはいるとこの地域の首長墓である毘売塚古墳(17)が築造される。全長４２ｍの帆立貝式前方後円墳で、舟形石棺を直葬している。この他に首長墓として考えられる古墳として、前方部が存在する可能性があり組み合わせ式石棺を主体部にもつ十神山古墳(18)、前方後方墳の油坪１号墳(19)があるが、いずれも墳丘規模は毘売塚古墳の半分程度である。

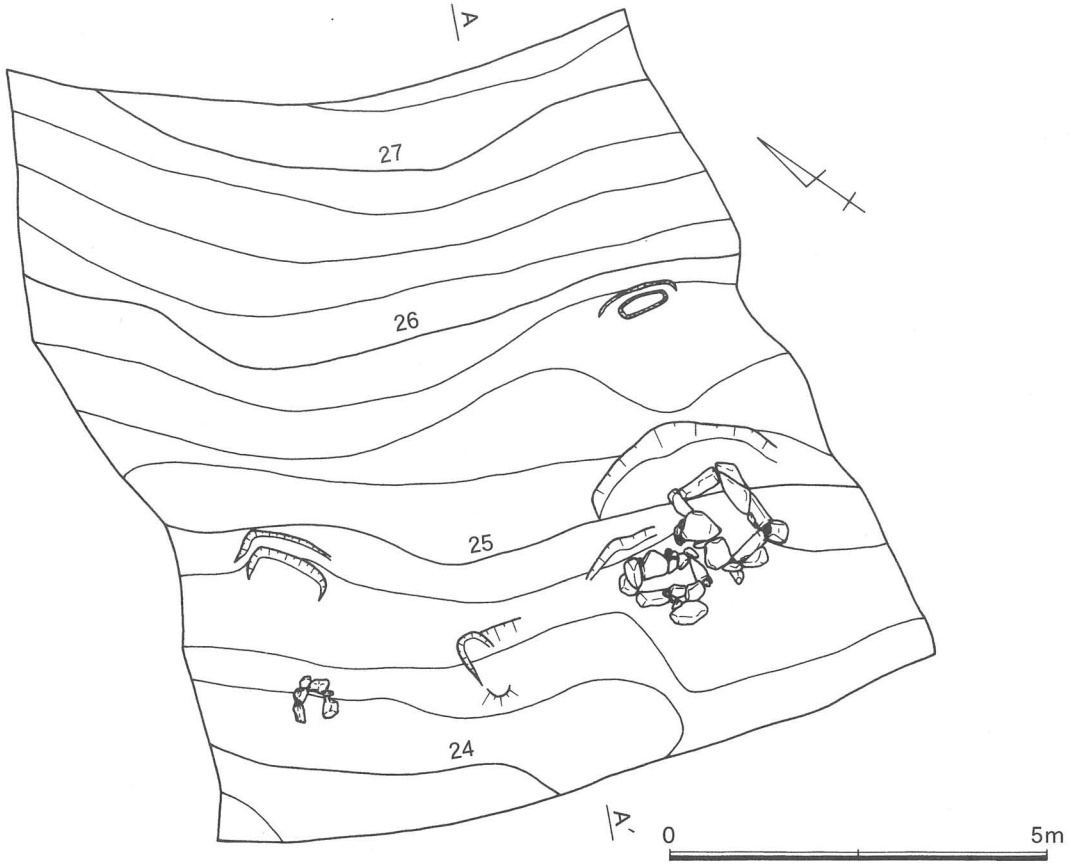
中期から後期にかけては、いずれも１０ｍ前後の規模を持つものであるが、小馬木古墳群、墳裾に円筒埴輪を巡らす油坪２・４号墳、石棺を主体部にもつ客神社跡古墳(20)・宮の山古墳(21)・御崎谷古墳(22)などが挙げられる。後期後半になると横穴墓が多数築造される。なかには墳丘を伴うものもあり浜小崎１号墳・岩屋口北１号墳(23)などが挙げられる。この他にも家形石棺を内蔵し金銅製大刀・馬具などを副葬する高広遺跡Ⅳ区１号横穴墓(24)、宮内遺跡１号横穴(25)、臼コクリ遺跡Ｓ区２号横穴(26)・Ｆ区２号横穴(27)など多くの横穴墓が築造される。１９９８年に安来市教育委員会が調査を行った小汐手横穴墓群Ｂ区９号穴からは国内２例目となる銀装ガラス玉が出土しており、大陸との交流を知る上での貴重な資料として注目を集めている。この小汐手横穴墓群の他、八神横穴墓群など中海沿岸に築造された横穴墓が多く確認され、築造地域が内陸部にとどまらないことも近年判明してきている。

奈良時代以降の遺跡として油坪３号墓(28)で、南北朝時代のものと推定される陶製宝篋印塔をもつ火葬墓が確認されている。

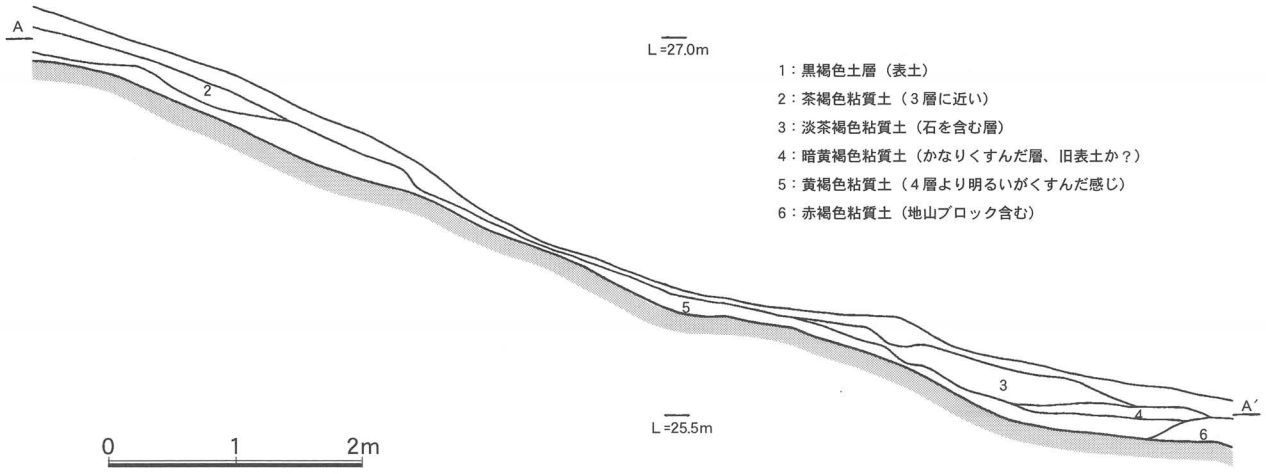
註)　(1) 安来市教育委員会　１９９８年調査
(2) 安来市教育委員会『小馬木古墳群』浦ヶ部地区住宅団地造成事業地内発掘調査報告書１　１９９８
(3) 安来市教育委員会『小汐手遺跡・黒井田小林遺跡』　１９９９
(4) 安来市教育委員会『長曽土壙墓群・剣畑１号墳』　２０００
(5) 安来市教育委員会『八神横穴墓群』島田地区ふるさと農道整備事業道路工事にかかる発掘調査　２００１
(6) 島根県教育委員会『高広遺跡』和田団地造成事業に伴う発掘調査　１９９２
(7) 島根県教育委員会『越峠遺跡・宮内遺跡』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　１９９３
(8) 島根県教育委員会『臼コクリ遺跡・大原遺跡』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　１９９４
(10) 註３に同じ
(11) 註８に同じ
(12) 註４に同じ
(13) 島根県教育委員会『岩屋口北遺跡・臼コクリ遺跡（Ｆ区）』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１３　１９９７
(14) 註４に同じ
(15) 安来市教育委員会『市道清水線試掘調査概報　新林遺跡・糺神社２号墳』　１９９３
(16) 安来市教育委員会『浦ヶ部遺跡群発掘調査報告書』　１９９４
(17) 大谷晃二・清野孝之「安来市毘売塚古墳の再検討」『島根考古学会誌』第１３集　１９９６
(18) 安来市教育委員会『安来市内遺跡分布調査報告』　１９９１
(19) 註１に同じ
(20) 松本岩雄「客神社跡古墳について」『ふぃーるど・のーと』Ｎｏ．５　本庄考古学研究室　１９８３
(21) 内田　才「原始・古代」『安来市誌』　１９７０
(22) 野津左馬之助『島根県誌』第４巻　１９２５
(23) 註１３に同じ
(24) 註６に同じ
(25) 註７に同じ
(26) 註８に同じ
(27) 註１３に同じ
(28) 註１に同じ

第３章　調査の概要

小馬木Ⅱ遺跡は、中海に岬状につきだした丘陵から南東に派生する低丘陵上に立地する。標高７５ｍの丘陵頂部から尾根が続き中海に面した部分は３５ｍほどの高まりとなる。このふたつのピークの鞍部の南東側斜面に所在している。調査前は、うっそうと生い茂る竹林で所々に立ち枯れた状態で梨の老木が見られた。このことから、梨畑として利用されていた場所が竹林となっていること



第３図　調査後測量図（１：１００）



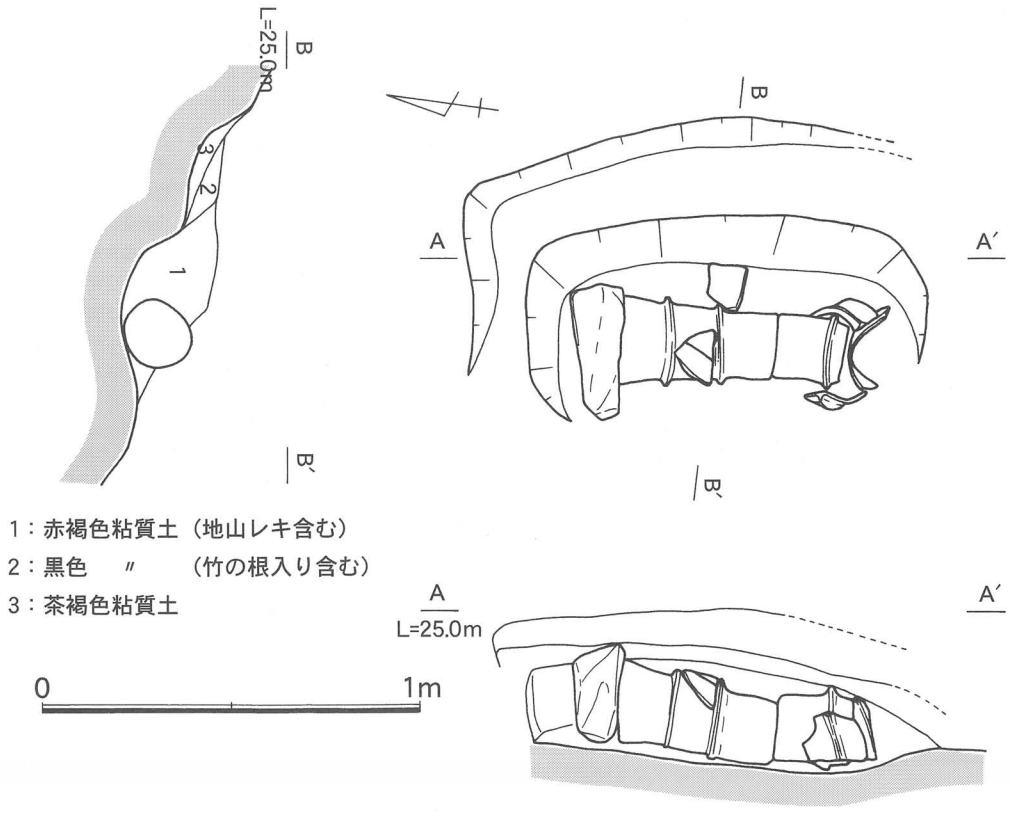
第４図　調査区セクション実測図（１：６０）

が分かった。また、果樹園の頃のものと思われる通路が歩ける状態で残っており、鞍部付近は若干の開削が行われているようにも見えた。このようなことから、果樹園造成時に地形の改変を受けていることが想像できた。

本調査では、試掘調査時に遺構の確認された第４・第１１トレンチの周辺を調査区とした。試掘調査時に検出した埋葬施設が埴輪棺を持つものと０．６ｍほどの小さなもので、培葬の可能性が考えられたことや調査前には第３・第４埋葬施設が検出された周辺がマウンド状の高まりをもっており、表土層の上に石が露出していたこともあったため古墳があるのではないかと思われたが、掘削を進めていく段階で石の集積による高まりであることが判明した。また、古墳に伴う盛土層や周溝なども調査区内には存在せず、古墳は存在しないものと判断した。その他、調査区内には住居跡等の遺構が存在せず、本調査で新たに検出できた遺構は第３・第４埋葬施設と不明遺構ＳＸ０１である。最終的に５つの埋葬施設の検出をみたがいずれも削平が大きく完全な形で検出できたものはなかった。それぞれの埋葬形態は埴輪棺によるもの、石組みによるもの、素堀のものなどの違いはあるものの、時期や大きさなど共通する部分もあることが分かり、特に築造時期については出土遺物から、近い時期に短期間で行われているものと思われる。

第１埋葬施設

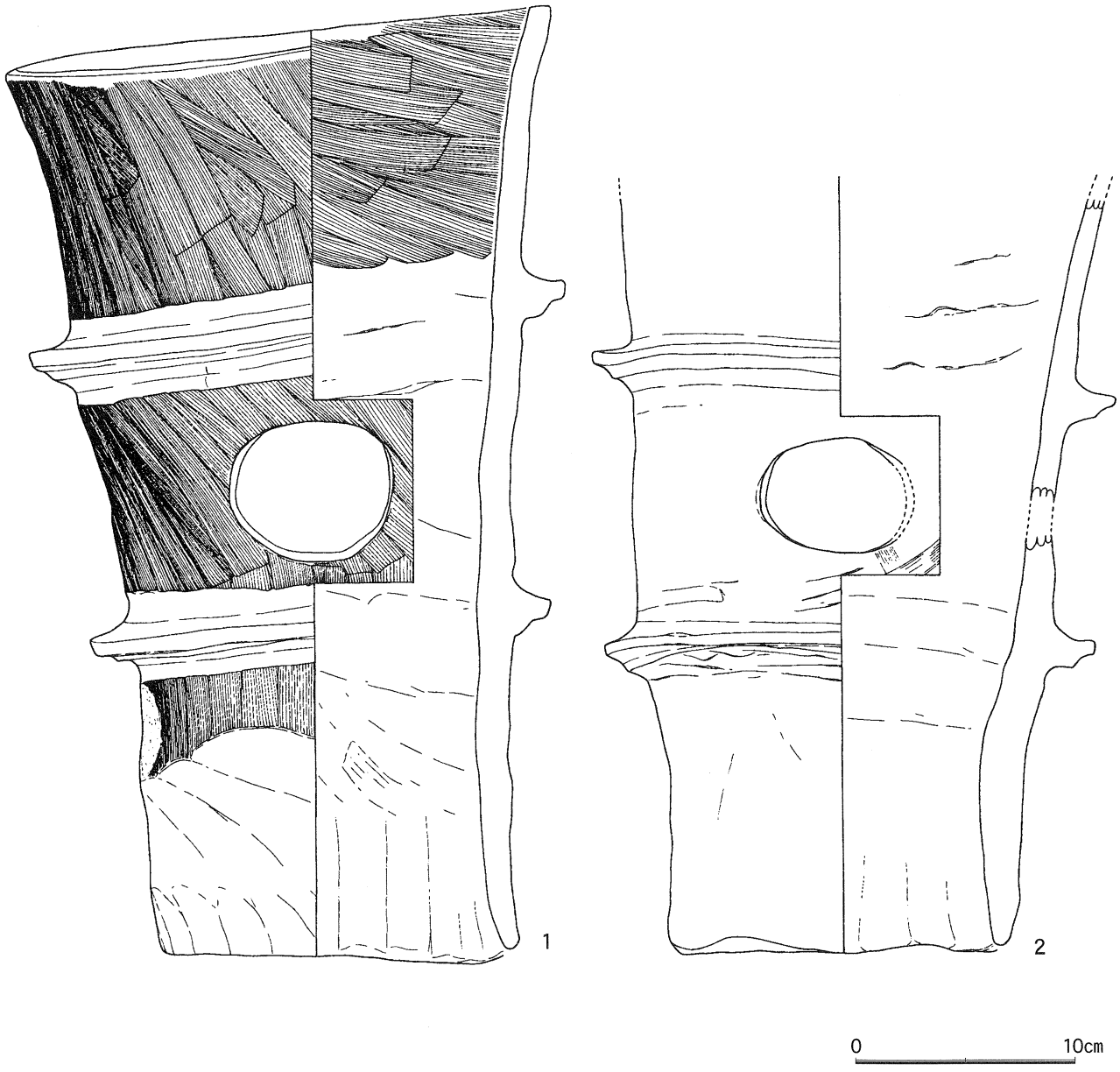
遺　構（第５図）　試掘調査時に確認できた埴輪棺をもつ埋葬施設である。棺の長さは０．６４ｍを測り、約０．４ｍの完形の円筒埴輪と約０．２ｍに切った円筒埴輪の基底部同士を合わせた形で埋葬している。完形の埴輪の口縁部分にあたる西側は石で塞ぎ、反対の東側は埴輪片を用いて蓋をしている。また、埴輪の透かし部分も埴輪片を利用して塞いでいる。取り上げ後、接合を行った結果、埴輪棺に用いられた底部と棺を塞いでいる埴輪片は同一個体のものということが分かり２個体の円



第５図　第１埋葬施設実測図（１：２０）

筒埴輪を利用した埴輪棺であることが確認できた。埋納坑は２段に掘り込まれており、１段目は北側の約３分の１、２段目は２分の１程度が残存している。残存部１段目は深さ約０．１５ｍ、２段目は長さ１．１ｍ・深さ０．２ｍを測る。１段目は削平が大きく分からないが、２段目は１．２ｍ×０．７ｍ、深さ０．２ｍほどの規模になると想像できる。

遺　物（第６図）　１は完形のまま埴輪棺として利用されたものである。保存状態が良く表面のハケ目など調整痕もよく観察することができた。２は割られた後に埴輪棺として利用されたものである。１に比して保存状態が悪く表面の一部にハケ目らしき痕跡は認められたものの、調整痕など細



第６図　第１埋葬施設出土遺物実測図（１：３）

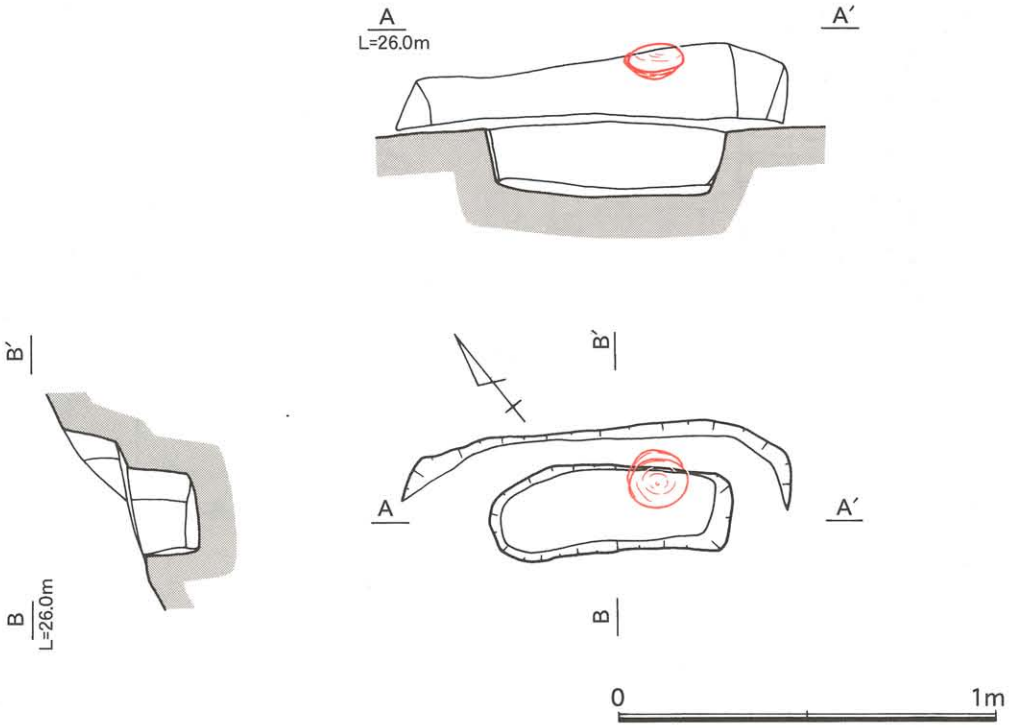
部の観察はできなかった。透かしと透かしの間が直線的に欠損しており、ふたつに割る際、この部分を道具によって打ち欠いたものであると考えられる。いずれも色調は橙褐色である。なお、以下の観察結果中の各部の名称は島根県教育委員会編『出雲岡田山古墳』(1)で使用されたものを踏襲し例言中に図示したとおりである。

1は、2段のタガをもち、口径25.2cm・底径16.2cm・器高43.2cmを測る。2段のタガにはいずれも段がつけられており、比較的しっかりとした突出をもつ。外面は口縁部・胴部はナナメハケ、基底部にはタテハケがみられる。基底部は斜めの圧痕が認められ、低端部は丸くおさめている。口縁部内面は横方向に近いナナメハケがみられるが、胴部は指頭圧痕のみが認められる。基底部はタタキの器具痕と思われる縦方向の圧痕が認められる。基底部のタテハケ目はタガの貼付による圧痕にすり消された状態になっている。ナナメハケの部分は、すり消された部分は見えないことから一次調整タテハケ→タガ張り付け→二次調整ナナメハケの順に調整が行われているものと思われる。

2も1とほぼ同様の形態である。二段のタガを持ちいずれのタガにも段がつけられている。底径16.0cmを測る。タガの位置が1に比べ低い位置についていることなどから、器高は若干低くなると思われる。調整痕ははっきりしないが、部分的にかすかに認められる調整痕から、1とほぼ同様の手法を用いているものと考えられる。

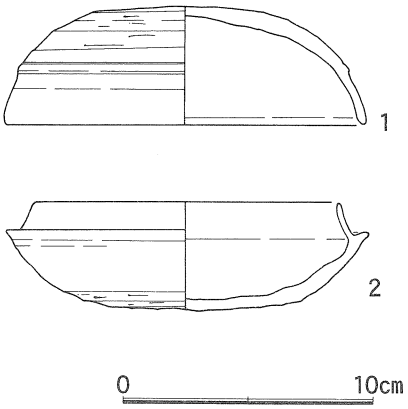
第2埋葬施設

遺　構（第7図）　素堀の2段墓壙である。地山面に掘り込まれており、第1埋葬施設同様試掘調査時に検出されたものである。地山面に掘り込まれており、上段は西側半分が損なわれているが、下段は完全な形で残っている。上段は長さ約1mを測り、下段は長軸0.65m・短軸0.23m、深さ0.2mを測る。墓壙上から、一組の須恵器・蓋坏がほぼ完形で検出されており供献されたもの



第7図　第2埋葬施設実測図（1：20）

と考えられる。墓壙の様子から南東側が頭部になっている可能性が高いと思われるが、現状からははっきりとしたことは言えない。



第８図　第２埋葬施設出土遺物実測図（１：３）

遺　物（第８図）　墓壙の上面から検出した個体である。一組の蓋坏で、いずれも色調は淡灰白色である。１は、坏蓋で口縁部に緩やかな段状の調整がみられる。ナデによるものと思われるが、口縁端部は残存状況が悪く、ごく一部に残る部分にみられはっきりしない。肩には沈線とナデにより突帯を表し、天井部のケズリは、中心部から丁寧に施される。口径１４．３cm・器高４．７cmを測る。２は、坏身である。内傾しながら立ち上がる返りを持ち口径１２．１cm・器高４．３cmを測る。底部は中心から丁寧にヘラケズリが施されている。いずれも、大谷編年出雲３期[2]のものである。

第３・第４埋葬施設

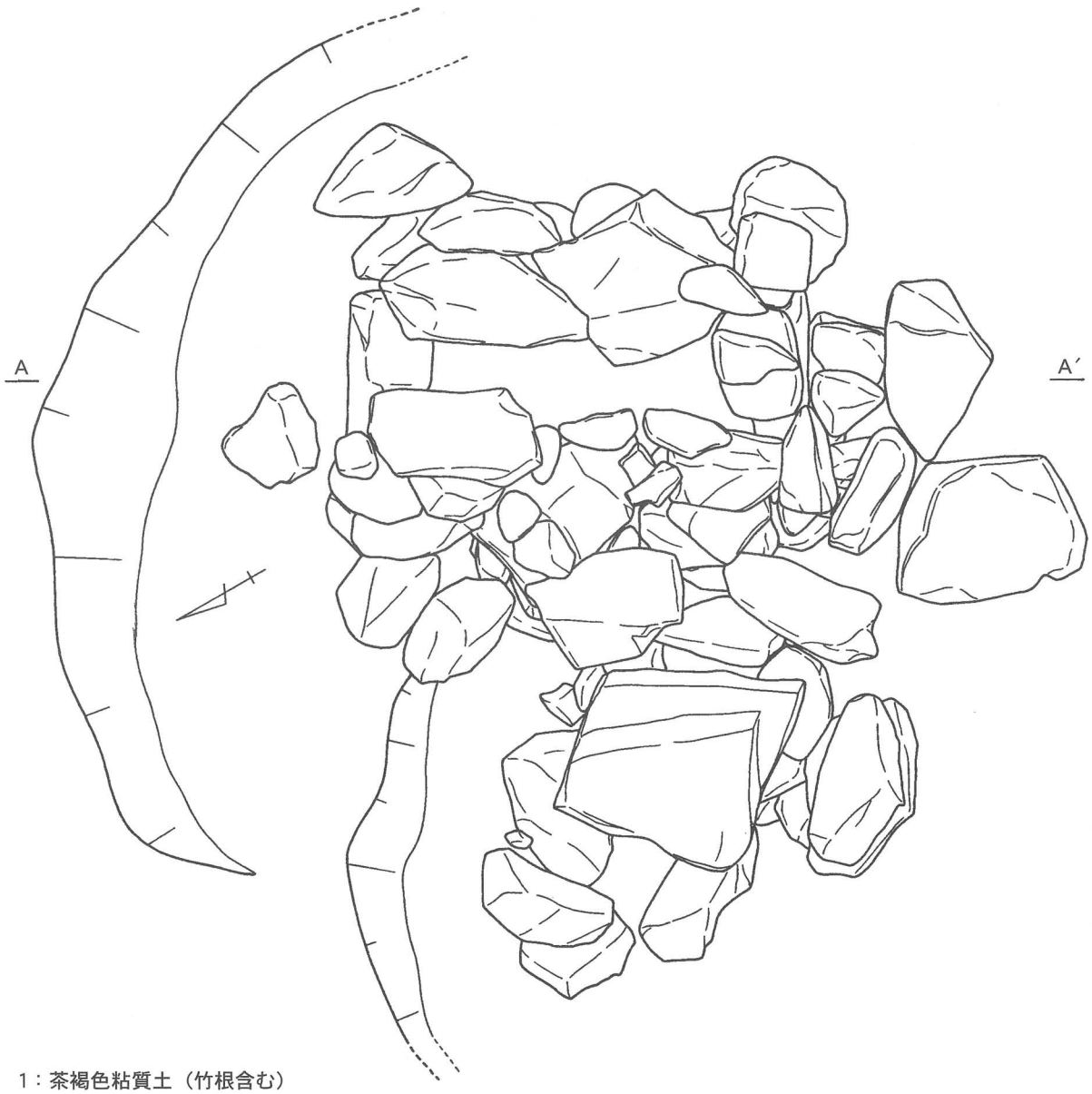
遺　構（第９図～第１３図）　ともに、石を組み合わせて造った埋葬施設である。表土掘削段階で、石の集積が見えたため精査したところ検出した遺構である。なお第９図は、ふたつの埋葬施設の上下関係の見えやすい図としたため、断面が若干異なることをあらかじめご了承願いたい。

第３埋葬施設は内測で長軸０．９６ｍ・短軸０．４７ｍを測り、大きめの板石を中心に構成されている。内面に平滑な面が来るよう組み合わせられており、特に長軸の両端の石は板状に加工した可能性があると思われる。木棺等の痕跡は認められず、地山直上に須恵器を枕状に２つ並べており、こちらを頭部として直葬しているものと考えられる。表土掘削時に墓壙内に土が堆積している状態が確認できていることから上部は削平されており、蓋石は撤去されているものと思われる。また、南側の石に対して北側の石が低くなっており、南側のほうがより大きく削平の影響を受けているものと考えられる。

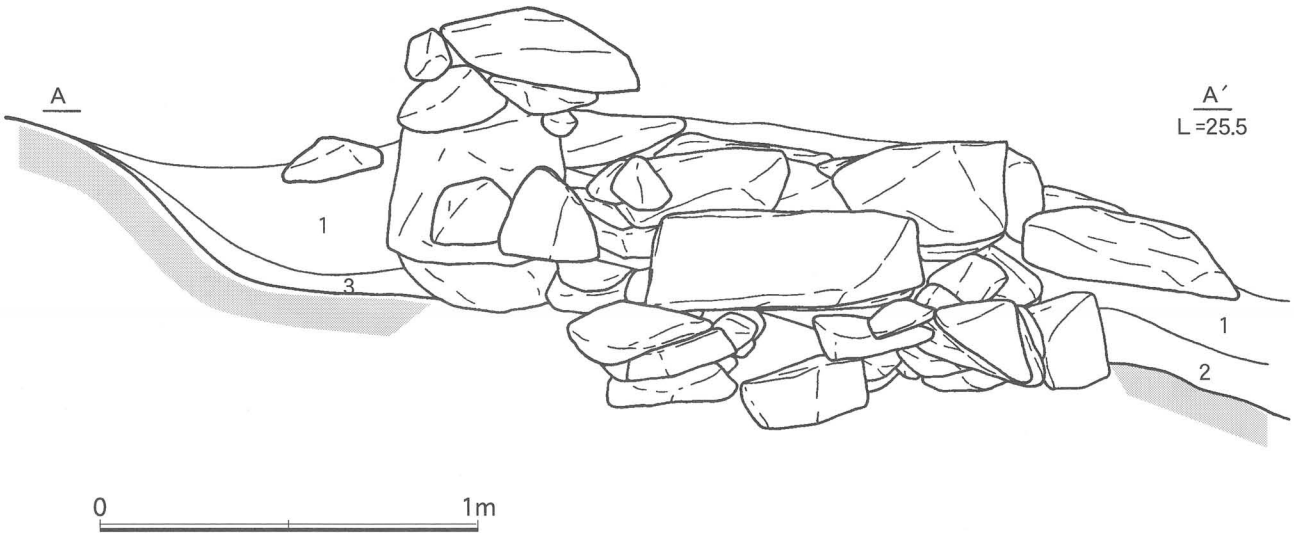
第４埋葬施設は第３埋葬施設の北側に接している。主軸は第３埋葬施設から約６０°北に向いている。内測で長軸０．９ｍ・短軸０．３５ｍを測り方形の石を何段か積み上げて作られている。石材は大きな加工を施した様子は見えず、自然石もしくは自然石の割石を積み上げたものであろう。北隅に一部破損が見られるが、蓋石らしき石が見えることから南隅は原状に近い形で残存しているものと思われる。第３埋葬施設同様、須恵器が枕状にあり南側が頭部であったと考えられる。また、木棺等の痕跡は認められず直葬であろうと思われる。いずれの墓壙内も、堆積土は竹根のカクランにより判別不能で、単一層に見えたため分層できなかった。築造時期の前後関係については検出状況からは確認できなかったが、出土遺物から第３埋葬施設のほうが先に築造されたものと考える。

遺　物（第１４図）　１・２は第３埋葬施設、３・４は第４埋葬施設から検出されたものでそれぞれ一対の蓋坏である。遺構の部分で述べたとおり埋葬施設内に枕のように並べられた状態で検出された。１・２は風化が激しく、焼成温度が低いためか、かなりもろい状態である。これに対して３・４は残存状況も良好でしっかりとしている。

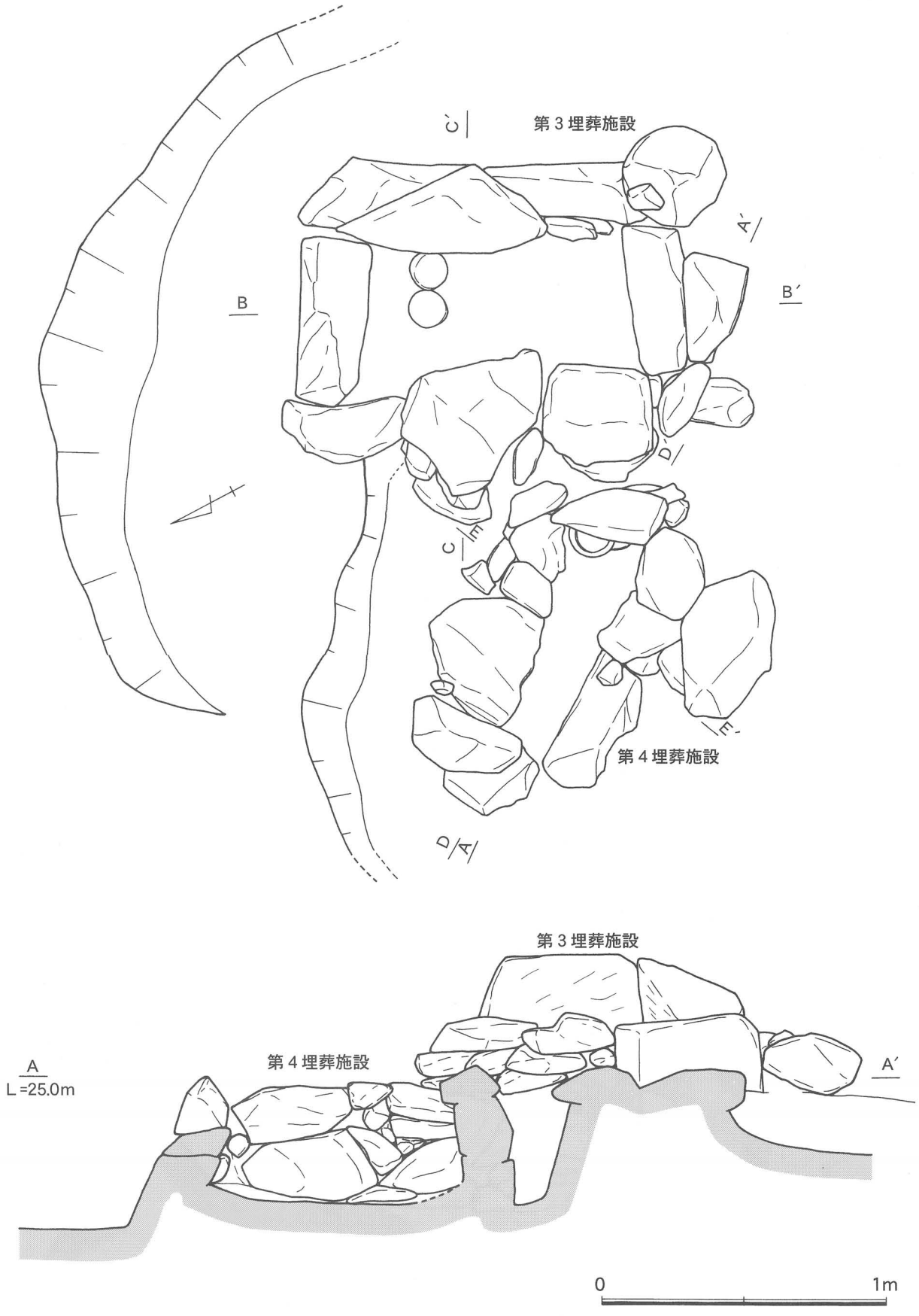
１は坏蓋で、口径１４．１cm・器高５．１cmを測る。全体に風化がひどく、また口縁端部は欠損している部分があるためはっきりしないがナデによると思われる緩い段がつけられている。肩部には



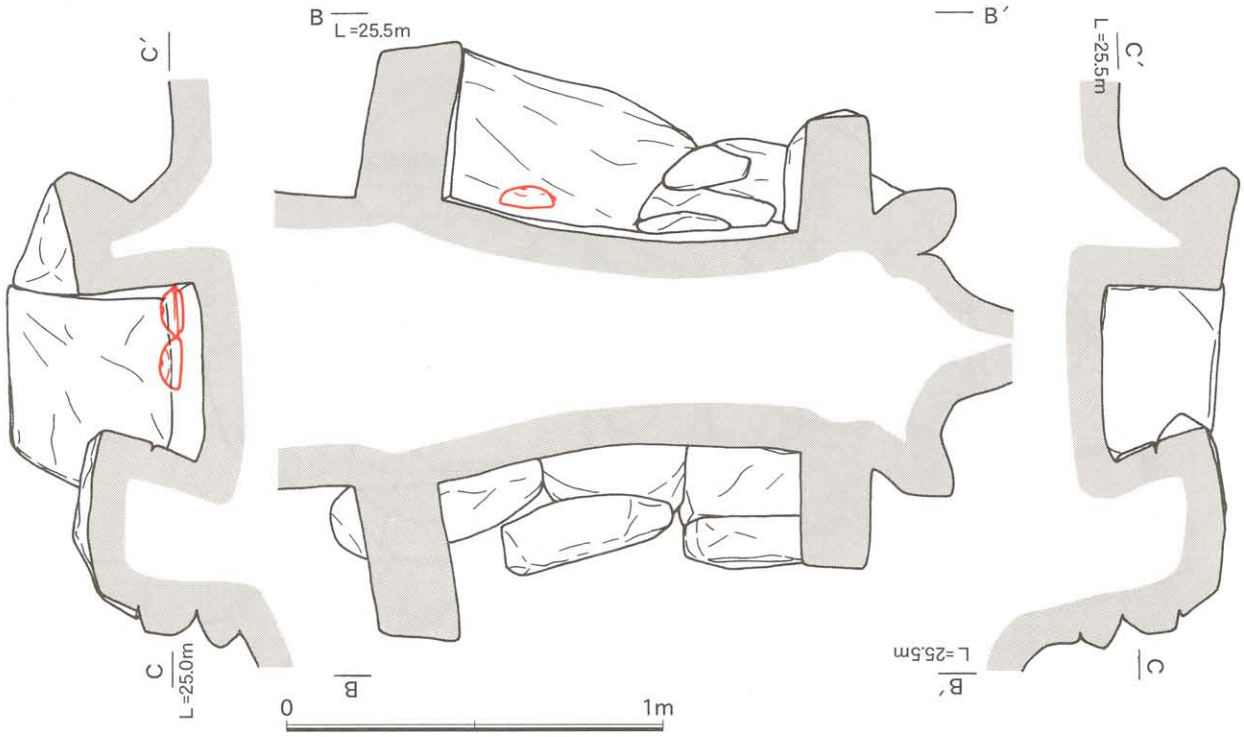
1：茶褐色粘質土（竹根含む）
2：赤茶褐色粘質土
3：黄茶褐色粘質土（地山レキ若干含む）



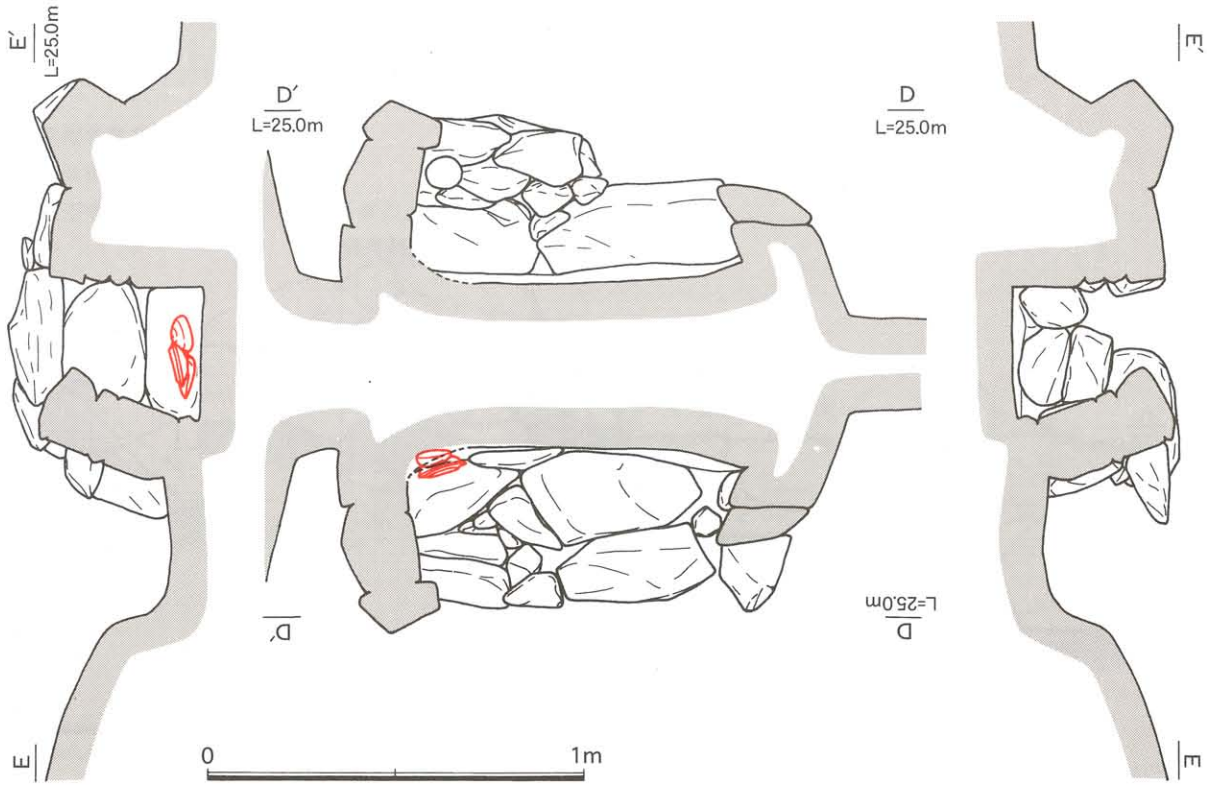
第9図　第3・第4埋葬施設実測図（1）（1：20）



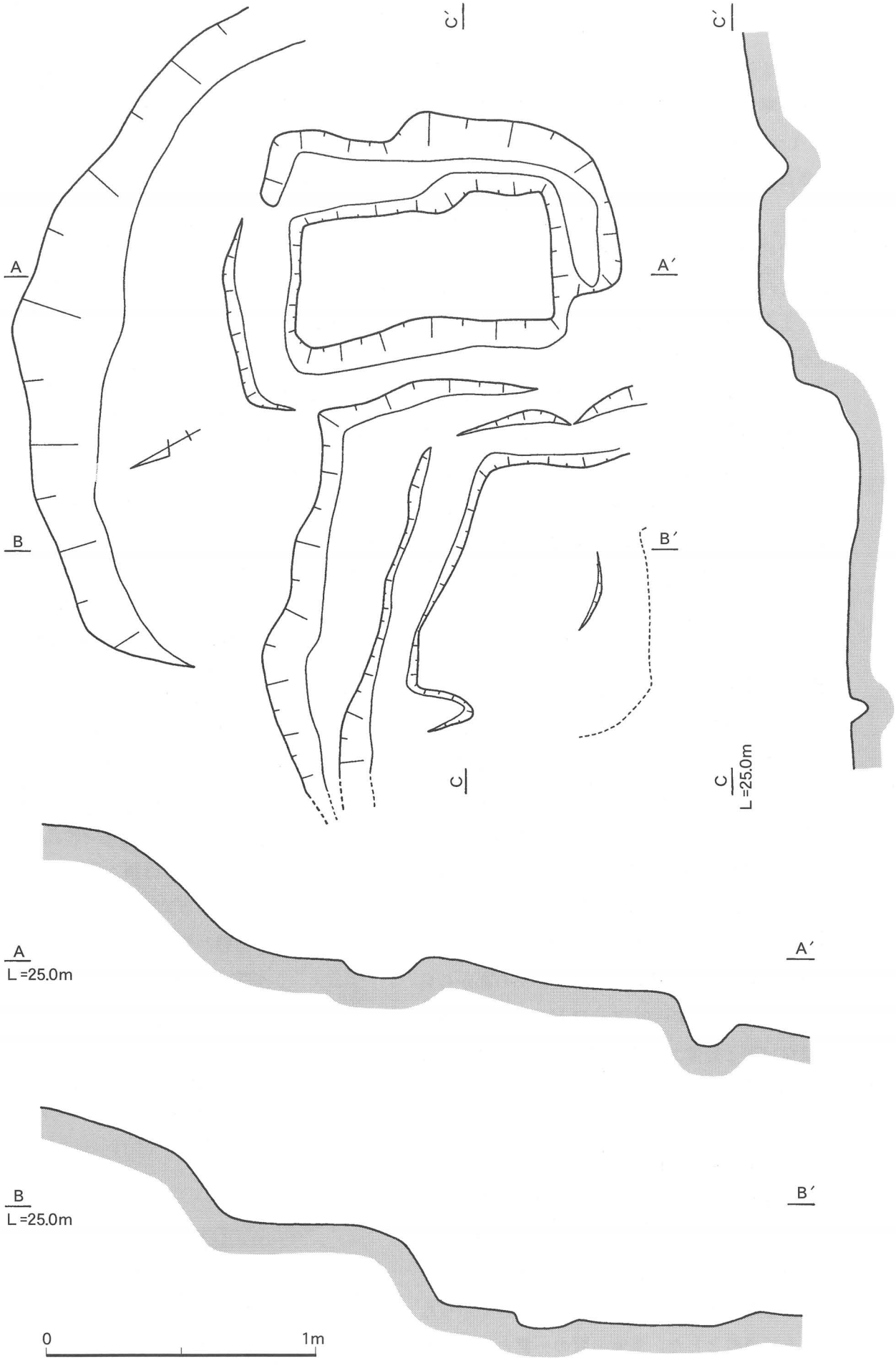
第10図　第３・第４埋葬施設実測図（２）（１：２０）



第11図　第３埋葬施設断面実測図（１：２０）



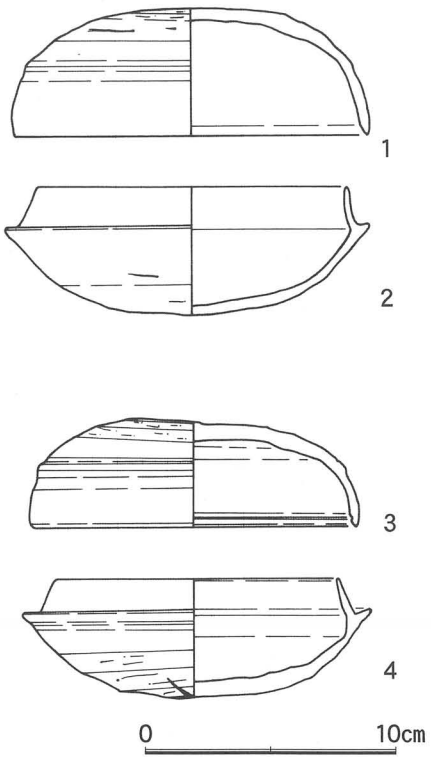
第12図　第４埋葬施設断面実測図（１：２０）



第13図　第３・第４埋葬施設実測図（３）（１：２０）

強めのナデもしくは沈線によって突帯を表している。天井部は中心から丁寧にケズリを施している。２は坏身で、口径１２．４cm・器高５．１cmを測る。内傾気味に立ち上がる返りを持ち、底部は中心から丁寧なケズリを施す。１・２のいずれも第８図の個体と同様な特徴を持ち、時期も同じく大谷編年出雲３期のものである。

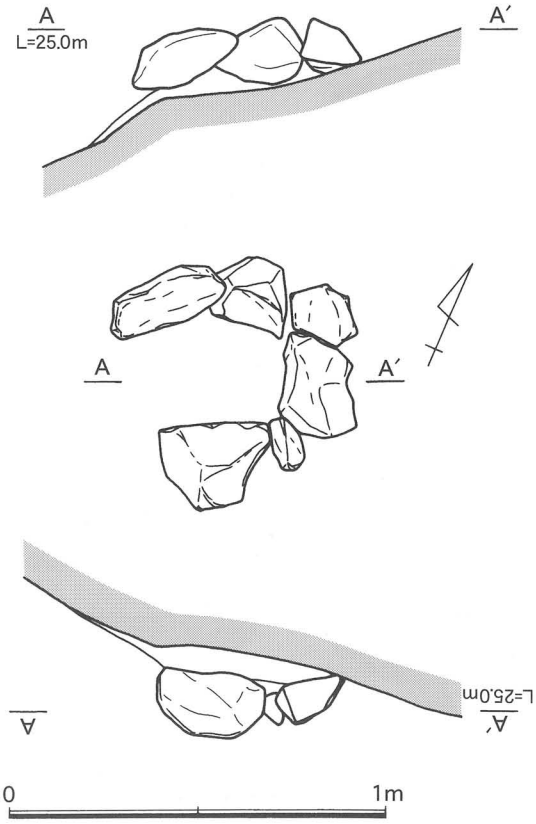
３は坏蓋で、口径１２．８cm・器高４．４cmを測る。口縁端部を肥厚にし内部に沈線を施して段を表現する。肩部には沈線と強めのナデにより突帯を表している。天井部にはケズリを施すが、頂部にはヘラ切りの痕跡が残る。４は坏身である。口径１１．３cm・器高４．７cmを測り内傾しながらまっすぐに立ち上がる返しをもつ。底部は中心部からケズリが施される。蓋は、ヘラ切りの痕跡が残るが坏身はきれいに削られている。ヘラ書きの一条の線が入っている。時期についてだが、出雲３期と４期のいずれの特徴も持っているように見え判断に迷った。このため大谷編年出雲３～４期のものとしておきたいが、いずれにせよ第３埋葬施設出土の個体よりも新しい様相をもっていると考えられる。



第14図　第３・第４埋葬施設出土遺物実測図（１：３）

第５埋葬施設（第１５図）

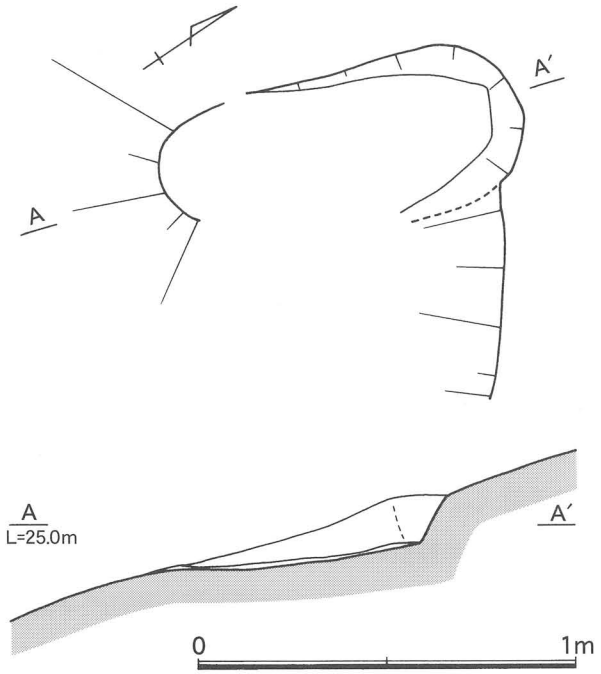
第１埋葬施設の西側に所在する。試掘調査時に第１埋葬施設と同一のトレンチ内から検出されたが、石組みの端の一部が残存しているに過ぎず、埋葬施設の可能性の高い不明遺構という取扱いだった。しかし、第３・第４埋葬施設の検出に伴いこれらと同様な埋葬施設の一部であろうと判断した。現状で深さ約０．２ｍ・最大幅０．２７ｍを測るが、残存状況が良くないためはっきりとしたことは言えないが、周辺の遺構や残存部の幅から見て大きくても０．６～０．７ｍほどの長さになるのではないかと想像される。遺物・埋設坑は検出できなかった。



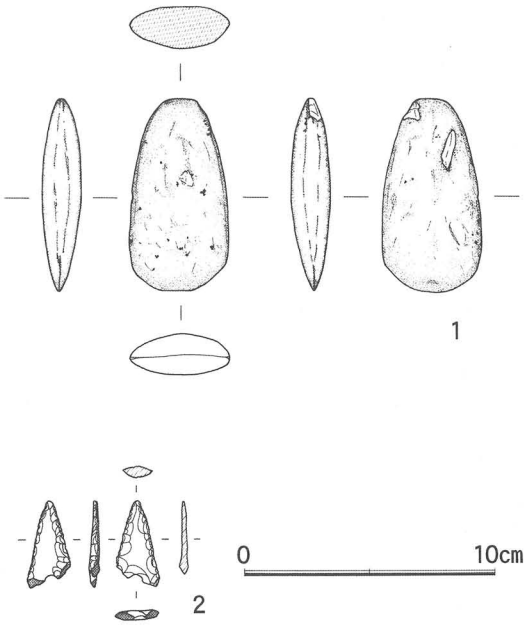
第15図　第５埋葬施設実測図（１：２０）

ＳＸ０１（第１６図）

第５埋葬施設と第３・第４埋葬施設のちょうど中間に位置する。この遺構は周辺の状況から見て埋葬施設である可能性が高いと思われるが、残存状況がきわめて悪くはっきりと検出できなかったため不明遺構とした。墓壙の肩の一部と底面平坦部のように見える部分が検出できたが、埋葬施設とするほどの積極的な根拠は見いだせなかった。



第16図　ＳＸ０１実測図（１：２０）



第17図　トレンチ出土遺物実測図（１：３）

深さ０．１５ｍ・最大幅０．４７ｍを測る。遺物は伴っていない。

遺構に伴わない遺物（第１７図）

いずれも試掘調査時にトレンチの堆積層から検出された遺物である。表土層からさほど深くないレベルで検出され、流入によるものであると考えられる。

１は第１４トレンチから検出された花崗岩質の石斧である。長さ７．７㎝・最大巾４．０㎝を測り、厚みは最大で１．６㎝ほどである。刃の部分は鋭く研磨されており全体的にも丁寧に仕上げられている様子がよく観察できる。２は第１トレンチから出土した石鏃で、返しの部分が一部欠けている。材質は安山岩質で欠けた断面をみると黒っぽい色調である。細かな打割によって整形されているが、摩滅によるためか細部は観察しにくい。

註）（１）島根県教育委員会『出雲岡田山古墳』　１９８７
（２）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」　『島根考古学会誌』第１１集　１９９４

第4章　まとめ

埋葬施設とその被葬者像について

ここでは、今回検出した埋葬施設について分かったことをまとめ、若干の考察を加えたいと思う。

まず、調査区内に点在する埋葬施設の時期についてであるが出土遺物からほぼ大谷編年(1)出雲3期の頃であると考えられる。第2および第3埋葬施設についてはこの時期のものに間違いなく、ほぼ同時期に築造されたものと考えられる。埴輪棺が出土した第1埋葬施設は、詳細は後述するが埴輪の特徴から見て同時期のものであると考えて良いであろう。須恵器の時期が新しい様相を見せる第4埋葬施設についても大きく時期が下がるとは考えにくく、第1～第3埋葬施設に続いて築造されていると考えられる。遺物を伴わず時期が不明な第5埋葬施設についてもこうした状況から考えて、同時期のものの可能性が高いように思われる。出雲3期は、出雲地方で横穴墓が築造され始める時期である。この遺跡の周辺でも小汐手横穴墓群(2)、高広遺跡(3)などでこの時期の横穴墓が確認されている。また、岩屋口北遺跡1号墳(4)は横穴墓を主体部としてもつ古墳で、同様な形態は浜小崎2号墳(5)にも見ることができる。出雲4期にはいると前述の遺跡で横穴墓が築造され続けるほか、黒鳥横穴墓群(6)や八神横穴墓群(7)などこの遺跡の周辺にも多くの横穴墓が確認されている。当遺跡の埋葬施設はこうした横穴墓と併行する時期に築造されたものと考えられる。

埋葬形態についてはそれぞれ特徴を持っている。第1埋葬施設に見られる円筒埴輪棺については、県内にいくつか報告例があるが、この時期の類例については稀有なように記憶している。第3・第4・第5埋葬施設に見られる石組みについては、松江市米坂古墳群(8)に類例を見ることができる。墳丘を持たない埋葬施設で「組合せ箱式石棺」として報告のある例がそれである。ここでは8基が検出されているが、この内埋葬施設C・D・Eは、時期的にもほぼ同じ頃のもので丘陵の斜面に築かれることなど共通点が見える。米坂古墳群の例は周溝を伴っているが今回検出した埋葬施設にはそうした様子は見られない。しかし、削平が激しく遺構の残りが悪かったことなどを考えると、周溝が巡っていた可能性も否定できない。また、米坂古墳群では丘陵尾根に12基の古墳があり、その裾部に埋葬施設が築かれている。古墳を築いた人物と埋葬施設を造った人物は直接的な関係はうすいと指摘されているが、少なくとも墓域と意識してこの場所に埋葬施設を築いているものと思われる。今回の検出例は周辺に古墳は存在せず、埋葬施設だけが5基密集して立地する。直近の調査区外に古墳もしくは横穴墓が存在する可能性があるが、広くこの丘陵全体を見渡すと古墳や横穴墓が周囲を囲むように点在することからこの丘陵全体を墓域と見なし、その一画に築いているという可能性も考えられるのではないだろうか。この点については、現段階では何ともいえないため、今後の課題としておきたい。

今回検出した5つの埋葬施設はいずれもが1mに満たないものばかりであり、成人を埋葬したとは考えにくい。小児もしくは乳幼児が埋葬されたと考えるのが妥当であるように思われる。素堀のものもあるが、石組みによるもの、埴輪棺を使用するものから見てある程度の勢力を持つ人物の近親者という被葬者像が考えられる。同時期に造られた第2と第3埋葬施設に若干のランク付けがあるようにも見えるが、墓壙の大きさから年齢的な差であるようにも見える。いずれにせよ、前記の

被葬者を中心としたものであろう。時期的に周辺の横穴墓と併行するものであることは前述のとおりだが、これらの被葬者と本遺跡の被葬者とは関係のある人物と考えることはできないだろうか。前述した丘陵全体を墓域と見なした場合、何らかの理由（年齢的な問題か？）で横穴墓に葬むることのできない人物の集団墓をこの一画に特別にしつらえたとは考えられないだろうか。以上の点は筆者の想像によるものであり、この遺跡の位置づけは周辺の発掘調査や類例の増加によって明らかとなるであろう。結論については、今後の調査例の増加を待ちたい。

第１埋葬施設出土の埴輪について

今回の調査の契機となった埴輪は一見して古墳時代後期のものである特徴を備えており、安来市内の横穴墓から出土したものによく似た特徴を持つものである。このことから、３点の類例とともにこの埴輪についてまとめておきたいと思う。高広遺跡Ⅴ区２号穴など埴輪の出土した横穴墓は市内に何カ所か散見できるが、いずれも完形となるものはなく比較しやすい例として３点をあげた。

今回出土した埴輪の類例として掲載するものは第１８図に示したとおりである。御崎山古墳(9)出土の個体は安来市内のものではないが、岩屋口北遺跡１号墳出土の埴輪との関連が指摘されているため比較資料として掲載した。

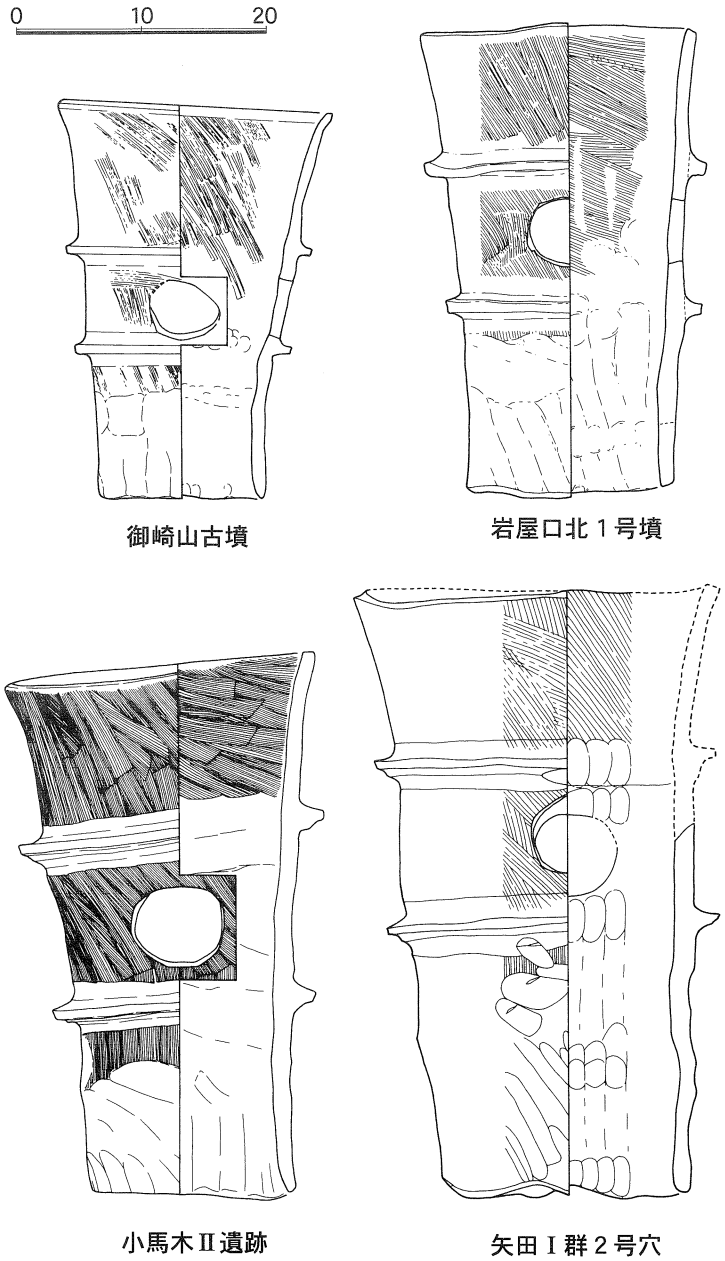
岩屋口北遺跡１号墳出土の埴輪は後背墳丘上から、矢田横穴墓群Ⅰ群２号穴(10)から出土したものは前庭部から出土したものである。大きさなど細部に若干の違いは見られるものの、いずれもよく似ていることがお分かりいただけると思う。岩屋口北遺跡報告書で出土埴輪の特徴として以下の点があげられている。

○基底部から口縁部にかけてわずかに開く形態で２段タガ。タガはよく突出する。

○外面調整はハケメで、口縁部のナナメハケは第２段タガを切っているものが多い。

○内面調整はナナメないし横方向のハケメ。

○底部調整は内面は縦方向の横



第18図　出土埴輪の比較

断型弧状の圧痕が、外面上方は横方向、下方はナナメ方向の横断型弧状の圧痕が見られる。（棒状工具によるタタキの痕跡）

○表面の色調は橙褐色、断面は暗青灰色を基本とする。

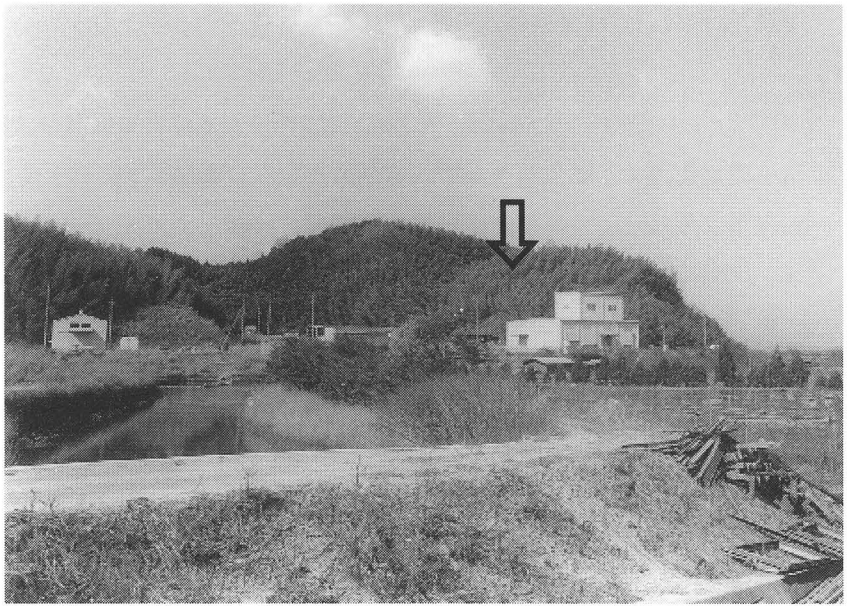
以上の点は、御崎山古墳の埴輪と共通する特徴としても指摘されているが、第１８図に掲載した個体すべてに共通する特徴でもあると思われる。特に、底部調整や外面調整のナナメハケの手法は小馬木Ⅱ遺跡の個体と同じといってよいほどのものである。ただし、タガの形状だけは小馬木Ⅱ遺跡と矢田横穴墓群に共通する特徴が見られる。タガに段を付ける意匠は、知りうる限りこの２例でこのことが、安来平野の地域性(11)であるかは現状では言い切れないが、特筆すべき点であると考える。このようなほぼ同様な特徴を持つ埴輪であるが、時期的には若干の前後がある。岩屋口北遺跡１号墳は大谷編年出雲３期のものであるが、矢田横穴墓の埴輪は共伴する須恵器から山本４期(12)のものである。つまり、岩屋口北遺跡１号墳の埴輪のほうが先行するのである。出雲３期は意宇平野周辺の勢力が安来平野に影響を及ぼし始めた時期である可能性が指摘(13)されているが、この影響は若干のタイムラグを持っていると考えられるのである。岩屋口北遺跡や小馬木Ⅱ遺跡の所在する安来平野の北側は、３期の段階で意宇勢力の影響を受け始め、矢田横穴墓群の所在する安来平野の南側（飯梨川東岸）では４期に入るということができるのではないか。飯梨川東岸ではこの時期、横穴墓が石棺式石室形に変わるなど意宇勢力の影響を受けていることが分かっており、このことも考えあわせると埴輪の時期差についても説明できるように思う。

以上のようなことから、安来平野の北側に所在する小馬木Ⅱ遺跡出土の埴輪は、大谷編年出雲３期のものであると考えられる。こうしたことからも、小馬木Ⅱ遺跡で検出された埋葬施設がごく短期間の内に造られたものであるということができる。

註　（１）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第１１集　１９９４
（２）安来市教育委員会　１９９８年調査　　１９基の横穴墓群で３期～４期の須恵器を伴う
（３）島根県教育委員会『高広遺跡』和田団地造成事業に伴う発掘調査　１９９２
（４）島根県教育委員会
『岩屋口北遺跡・臼コクリ遺跡（Ｆ区）』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１３　１９９７
（５）安来市教育委員会『浦ヶ部遺跡群発掘調査報告書』　１９９４
（６）安来市教育委員会『黒鳥２号横穴発掘調査報告書』　１９８４
（７）安来市教育委員会『八神横穴墓群』島田地区ふるさと農道整備事業道路工事にかかる発掘調査　２００１
（８）松江市教育委員会・松江市教育文化振興財団
『西尾地区農林漁業用揮発油財源身替農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　１９９９
（９）大谷晃二ほか「御崎山古墳の研究」１９９６　島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘
（10）山本　清「安来・矢田横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第１集　島根県教育委員会　１９６９
（11）藤永照隆「円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第１４集　１９９７
今回例示した埴輪は、すべてこの編年の５期のものだが４期～５期にかけては小地域ごとの差は小さいと指摘されている。
（12）山本　清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論文集』　１９６０
（13）註４の中で、この可能性が指摘されている。

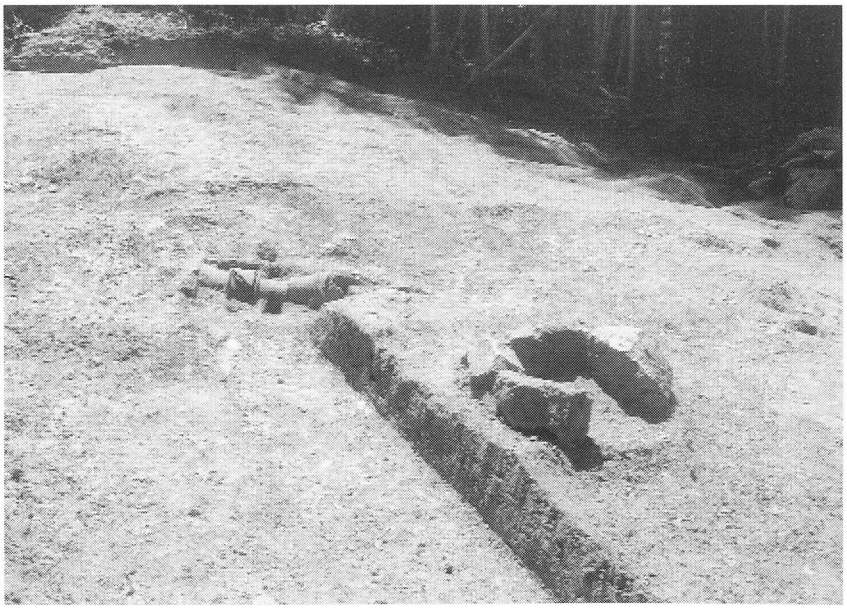
写　真　図　版

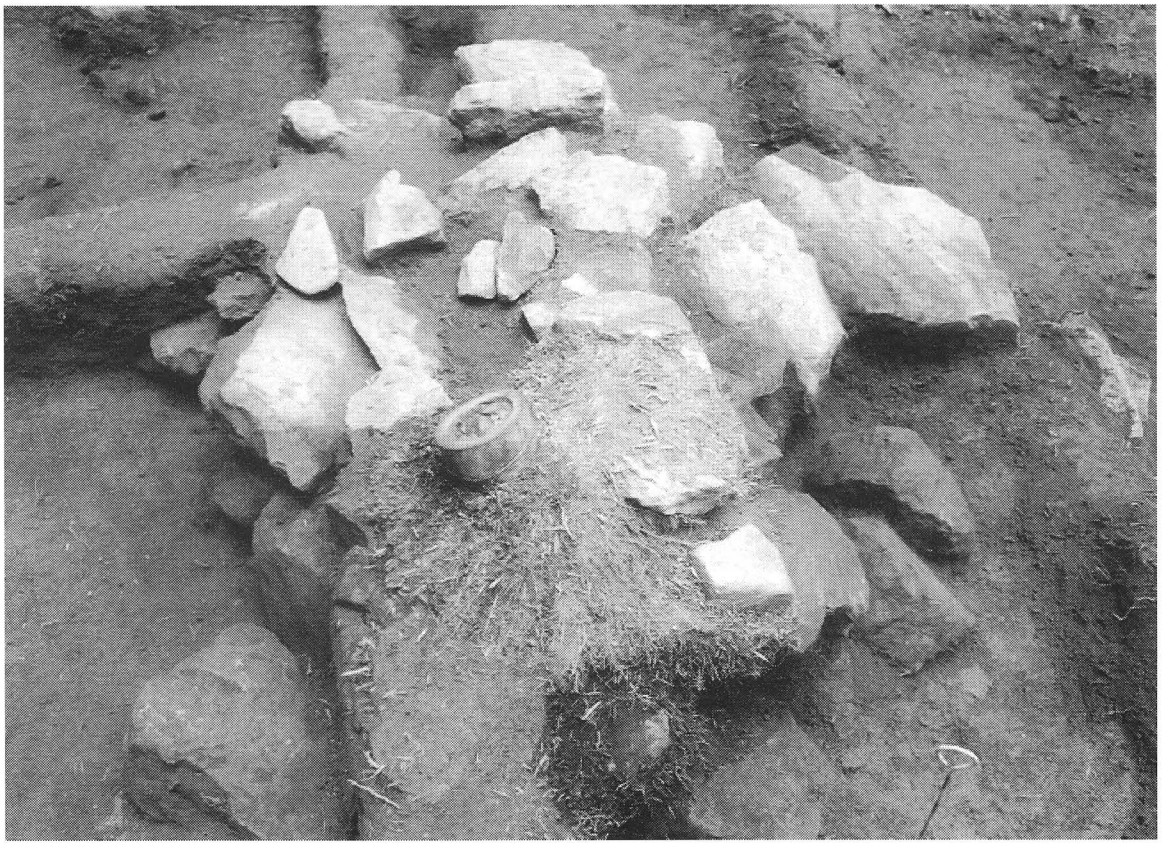
調 査 区 遠 景



調査区全景（西から）

調査区全景（北から）

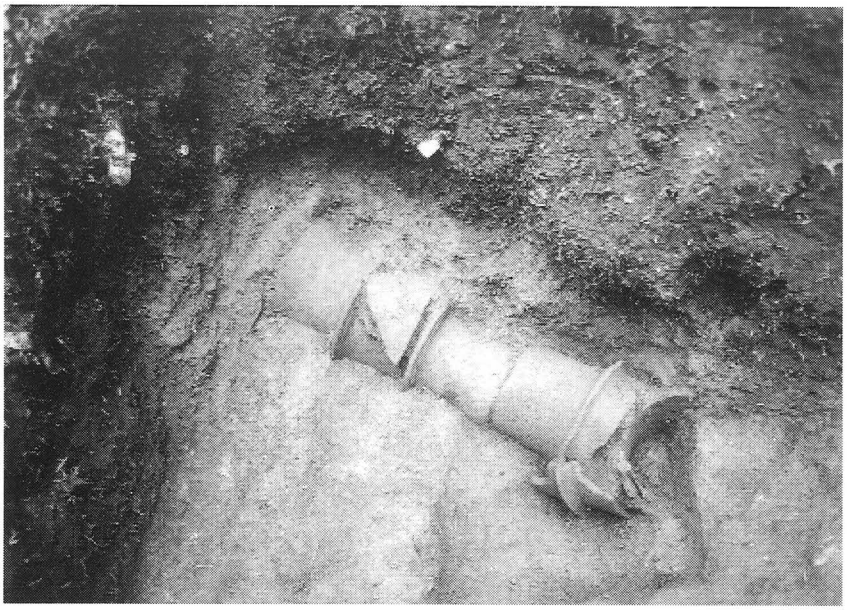




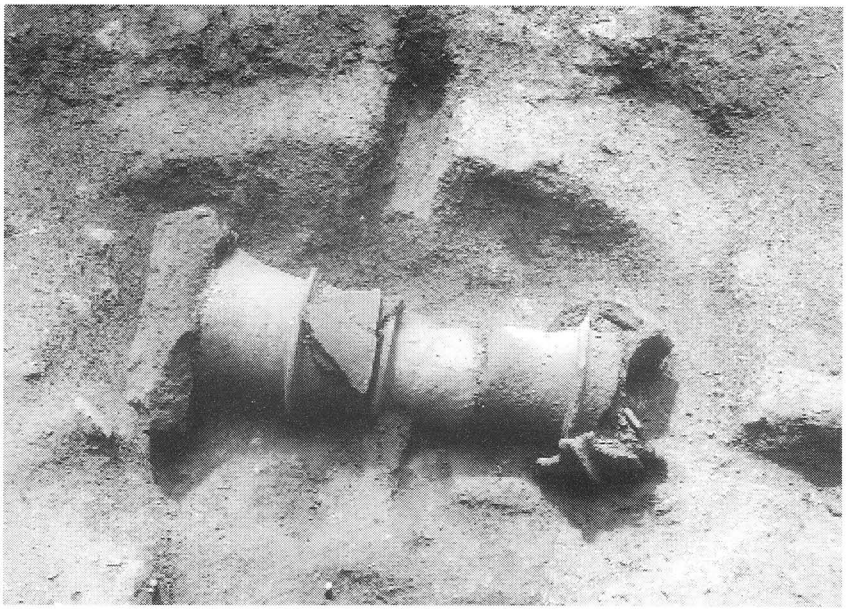
第３・第４埋葬施設検出状況

第３・第４埋葬施設完掘状況

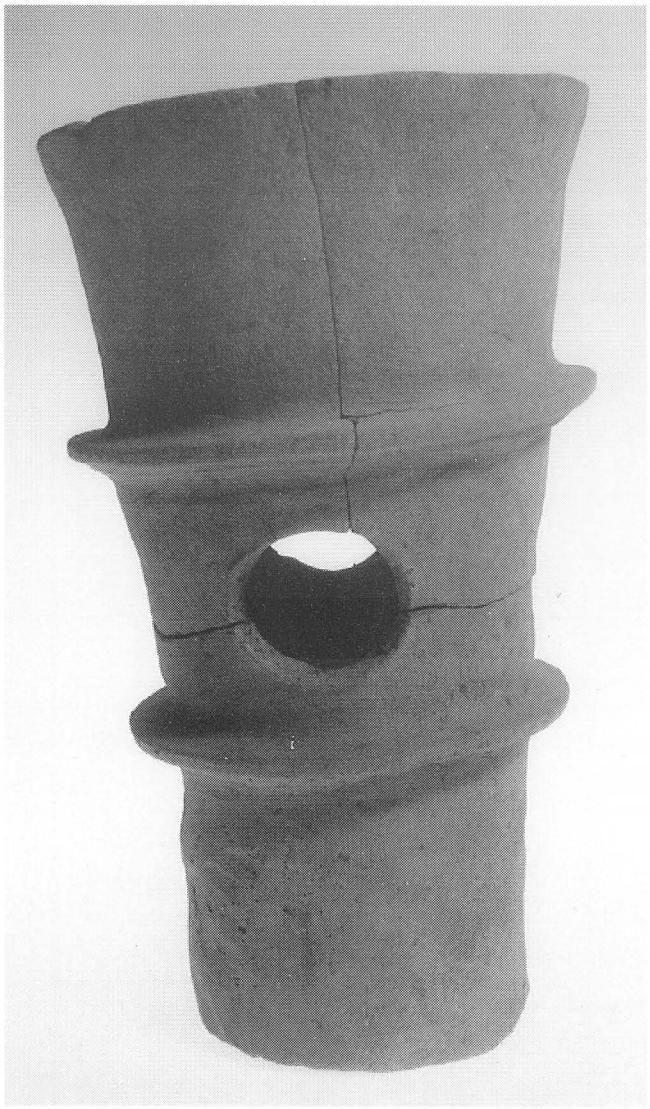
第２埋葬施設完掘状況



埴輪棺検出状況
（試掘調査時）

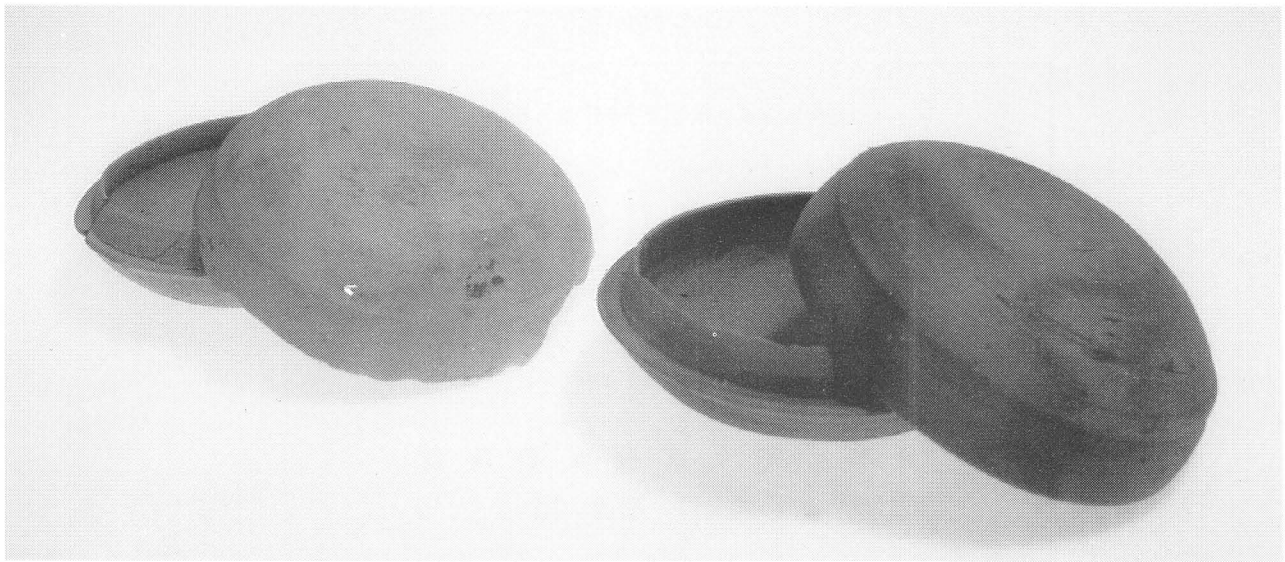


第１埋葬施設完掘状況



第 1 埋葬施設出土埴輪

第 1 埋葬施設出土埴輪



第 2 ・第 4 埋葬施設出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こまきⅡいせき
書名	小馬木Ⅱ遺跡
副書名	堅信寺永代供養塔建立に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	安来市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第３８集
編集者名	大塚　充
編集機関	安来市教育委員会
所在地	〒692-0011　安来市安来町８７４番地２０　TEL0854-22-3927
発行年月日	西暦２００２年３月１５日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間
小馬木Ⅱ遺跡 （こまきⅡいせき）	島根県安来市黒井田町	32206		35°25′78″	133°16′83″	20010625 ～20010906

調査面積	１５０㎡	調査原因	開発に伴う事前調査	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小馬木Ⅱ遺跡	墳墓	古墳時代	埋葬施設５、埴輪棺	埴輪・須恵器石器、	石郭をもつ埋葬施設や埴輪棺を検出した

安来市埋蔵文化財調査報告第３８集

小馬木Ⅱ遺跡

堅信寺永代供養塔建立に伴う埋蔵文化財発掘調査

２００２年３月

発行　安来市教育委員会

印刷　有限会社　松浦印刷